

聖人のつねのおおせには「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」
(『歎異抄』 後序より)

聖人のつねのおおせには「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」
(『歎異抄』 後序より)

「わたし」に悩むひと (下)

第4組 栄光寺住職

佐々木 強

text by Tsuyoshi Sasaki

「明るい人はすばらしい 悩んでいる人は尊い」林暁宇師の法語である。この明るい人、悩んでいる人とはどういう人か。

ある新興宗教の女性らがお寺に勧誘に来た。お互いに学んできた「正しい宗教」を語る。時間が来てその人は言葉を残し立ち去った「神の国はもうすぐ定員オーバーです」。神を信じて入信すれば神の国に行くこと間違いなし。今なら間に合う、早く決めよということだろう。次の日、怒りが収まらず寺の掲示板に「浄土に定員なし。浄土は広大無辺際なり。」と張り出した。それから、彼女たちの訪問を待つが訪ねてこない。

さて、冒頭の法語にある「明るい人」とはどんな人だろうか。私にとって明るい人は、お念仏の教えを聞き、うちのお寺に来てくれる人である。先日、息子が得度してくれた。嬉しくて、嬉しくて仕方がない。いま私にとって最も「明るい人」である。では、さきの新興宗教の方にとって明るい人はどのような人か。おそらく神の国を選び入信するものを言うのだろう。この両者に共通点がある。それは私の思いに適うということだ。私の思いに適うものは誰でもマルである。その代り私の思いから外れるなら、自分でも、そして我が子でも認めず許さないだろう。

親鸞聖人の御和讃に「聖道門のひとはみな 自力の信をむねとして 他力不思議にいりぬれば 義なきを義とすと信知せり」(正像末和讃)とある。聖道門とは「この世で仏となるために修業を積む道」とある。この和讃は「広い世界(他力)との出遇いは、我が思い(自力の信)小さな世界を知らされたところにある」とある。真宗の僧侶となり満二十七年になる。真宗を学ぶなかで聖道門とか自

力と言うといつの間にか忌み嫌ってきた。しかし、「お念仏の教えこそが明るいからお念仏をせよ」と他者に言う私はどうだろう。確かに「ただ念仏のみぞまことにておわします」だから明るいのだ。しかし他者を明るみにするのではない。「親鸞一人がため」と言ってゆかれたのは、自分自身を照らし明らかにしてゆかれたお言葉ではないか。「悩んでいる人」とは自身のなかにしっかりと鎮座する「明るい人」を認識することではないか。その我が思い「明るさ」を知らされるところに、阿弥陀仏の本願との出遇いがあると言える。

「悩みというものには二種類あります。一つは自分以外の他のことが問題となる悩み。もう一つは自分自身が問題となってゆく悩みです。この自分自身が問題となるところに尊いということがあるのではないのでしょうか。」巖城先生のお言葉です。この「尊い」とは誰が言うのか。

報恩講での読まれる御和讃に「他力の信心うるひとを 敬いおおきによろこば すなわちわが親友ぞと 教主世尊はほめたもう」（正像末和讃）という和讃がある。ある書には「他力の信心を得て敬い喜んだならば、その人を、という意味で、『を』の字は二句目の終わりにつく意である。」（『三帖和讃講義』 柏原祐義著）と書かれていた。聖典を開くと「他力の信心うるひと」との文字の横に「法然上人」とメモがあった。批判を恐れずに言えば、私にはこのように聞こえる。「法然上人の仰せは本当でした。お念仏とはわが身を教えられ聞いてゆく道でした」とすると「すなわち」即座にお釈迦さまの声が聞こえる。「よく気が付いたね。親しき友よ。私もいつもわが身に悩みながらお念仏申したのだ」と。親鸞聖人はお念仏申すなかで法然に会い、そしてお釈迦様の声を聞いたのだ。お念仏とはこのわたしのためであった。そう受け取ることの難しい私に用らいている。